

日本語学習者による陳述副詞の使用実態

— 日本語学習者コーパス I-JAS を用いて —

胡娜

キーワード：陳述副詞、使用傾向、母語別、タスク別、習熟度別

1. はじめに

日本語の副詞は、名詞、動詞、形容詞などの品詞と異なり、形態上活用せず、単独で文の命題構造の中核的部分を形成することもできない。しかし、コミュニケーションという観点から見れば、副詞を有効に駆使することによって、伝達効果が上がり、命題内容がより詳細に表出されるとともに、命題内容および文脈に対する話者自身の判断、伝達行為における聞き手との関係などが明らかになるのである（国立国語研究所 1991）。その一方で、日本語教育現場では、副詞を取り立てて指導する機会が少ないのが現状である（王 2007）。教科書の中では文型・文法と一緒に提示されるケースが多いにもかかわらず、副詞そのものの使用に関する説明や解釈がほとんどないというのも実情と言えよう（大関 1993a）。教育現場ではいかなるポイントに注意すべきか、コミュニケーション能力の育成を目指す教材やシラバスではどのように副詞を提示すべきか、有効な指導法の開発等、解決しなければならない課題が多いと思われる。

このような現状を改善するために、日本語学習者の習得状況を体系的に明らかにし、それに基づいて有効な指導法、教材やシラバスを開発することが急がれている。そこで、本研究はそのための一歩として、副詞の一種類である陳述副詞を取り上げ、日本語学習者による陳述副詞の使用状況を網羅的に考察し、その全体的な使用傾向を明らかにすることを目的とする。そのために『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』（International Corpus of Japanese as a Second Language）（以下、I-JAS）を用いて学習者と日本語母語話者の使用状況を比較し、日本語学習者による陳述副詞の使用頻度および多様性、高頻度語、過剰使用・過少使用語を明らかにする。また、母語別、タスク別、習熟度別に学習者の使用実態を多角的に考察し、それぞれの差異や特徴を抽出する。

2. 先行研究

2.1 陳述副詞の定義と本研究の範囲

日本語副詞の定義や分類については、研究者によって意見の分かれるところであり、まだ統一した結論には至っていないようである。そこで、本稿は副詞の認定を問題にせず、I-JAS の検索アプリケーション「中納言」の「品詞検索」機能を利用し、日本語学習者によって使用された副詞用例を検索することにする。しかし、副詞用例からどのように陳述副詞用例を抽出するかが問題になる。陳述副詞は副詞の下位分類であり、「修飾される語の実質には関係せず、種々の叙述の態度を詳しくし、明らかにする」（山田 1936）ものとされている。本稿では、川口ほか（1996）と工藤（2000）の分類を参考に、その「叙述の態度」の細分化を試み、以下の12種類の意味用法

を表す副詞を陳述副詞と認定し、研究対象とする。

- a. 〈意志・願望〉 今度必ず勝って見せる。
- b. 〈命令・依頼〉 ぜひ教えてください。
- c. 〈疑問〉 いったいどこに行ったの。
- d. 〈感嘆〉 なんてきれいな花なんだ！
- e. 〈確信・必然性〉 きっと、あいつが犯人に違いない。
- f. 〈推測・可能性〉 たぶん、犯人はあいつだ。
- g. 〈強意否定・不可能〉 彼は決して犯人ではない。
- h. 〈評価・注釈〉 あいにく明日出勤しなければならない。
- i. 〈比況〉 まるで嵐のようです。
- j. 〈仮定・条件〉 もし雨が降ったら、試合は中止です。
- k. 〈譲歩〉 確かにそうかもしれないが、それにより生まれた問題も無視できない。
- l. 〈取り立て〉 ただ君だけが頼りだ。

2.2 日本語学習者の陳述副詞習得に関する先行研究

陳述副詞は多様な用法を持ち、様々な文脈に用いられ、しかも構文上、文末表現と呼応関係や呼応制限を有するものが多い。そのため、学習者にとって陳述副詞の学習は決して容易とは言えないだろう。張（2009）は中国語母語話者の日本語学習者を対象にアンケート調査・意識調査を行い、「推定」を表す一群の陳述副詞が中国語母語話者の日本語学習者にとって最も難しいということ、また推定の陳述副詞の中で「どうも」と「どうやら」の使い分けができないということを示した。李（2011）は中国語母語話者の日本語学習者 20 名を対象に、使用頻度の高い 15 個の陳述副詞を用い、文を作らせるという調査を実施し、陳述副詞の誤用傾向を考察し、その原因を探った。調査の結果、誤用傾向に関しては①文末表現と呼応しない傾向、②意味を混同する傾向、③呼応関係を誤用する傾向の 3 点が見られた。また、誤用の原因について日中両言語の副詞の混同、そして、教育現場の説明不足の 2 点を指摘している。王（2004、2005、2006a、2006b、2007、2008、2009、2014）の一連の研究は認知言語学の観点から、中国語母語話者の日本語学習者における陳述副詞「きっと」「必ず」の習得について多岐にわたって調べた。「きっと」「必ず」および中国語の“一定”の意味構造の違いを明らかにし、学習者の「きっと」「必ず」の使用は母語の負の転移を受けている可能性があるとしている。

2.3 日本語教育現場と教科書における陳述副詞の取り扱いに焦点を当てた研究

王（2007）は、日本語教師への聞き取り調査を通じて日本語教育現場における陳述副詞の指導実態を明らかにした。その結果、「説明しない」、「単語だから、わざわざ教えなくてもいい」、「初級者を教えているので、混乱させないため、語彙の細かい使い分けを保留している」という答えが見られ、指導していない場合があることを示した。「指導する」と答えても、「中国語（母語）で説明した」、「初級段階の学生を指導しているので、共起パターンを簡単にしか説明しない」とどまっているようである。また、大関（1993a）は初級日本語教科書 16 冊、中・上級日本語教科書 8 冊から副詞を抜き出し、初級、中・上級教科書で扱われている副詞の特徴をまとめた。陳

述副詞については初級で扱われる文型・文法と一緒に提示されるケースが多く見られたと指摘している一方、中・上級の教科書は新聞や小説など生のものを使ったものが多いため、出てくる語彙の偶然性が高かった。さらに、「コミュニケーション上重要な役割を果たしている副詞のニュアンスは、現行のテキストではあまり取り扱われていない」と教科書の説明の不備を指摘し、「偶然提出するのではなく、意識的に学習項目として提出する必要性」があると主張している。

以上のことを踏まえ、陳述副詞の習得には学ぶ側はもちろんのこと、教える側にとっても解決しなければならない課題が多いように思われる。これらの課題を解消するために、学習者の習得状況を明らかにし、その上で有効な指導法、教材やシラバスを開発することが望まれる。しかし、これまでの陳述副詞の習得に関する先行研究は、小規模な調査紙調査が多く、中国語母語話者を対象としたものがほとんどである。また、習得段階については、上級など単独の段階を扱ったものが多く、学習者の習得過程を体系的に調べたものは少ない。しかも、学習者の誤用傾向、母語の影響などを検討したものが多いため、学習者の習得メカニズムを十分に解明したとは言い難い。迫田ほか（2016）は、「大量のデータを扱うことで、日本語能力レベルと言語発達の関係、習得困難点の要因や言語習得のメカニズムの解明の糸口を見つけることができる」と述べている。よって、本研究では、大規模な日本語学習者コーパス I-JAS を活用し、母語別、タスク別、習熟度別に日本語学習者による陳述副詞の使用傾向を多角的に考察し、その全体像を捉えることを目的とする。

3. 研究課題

本稿では、日本語母語話者の使用と比較しながら、日本語学習者による陳述副詞の使用頻度、多様性、高頻度語、過剰使用・過少使用語を明らかにする。また、母語別、タスク別、習熟度別に学習者の使用状況を実証的に考察し、それぞれの差異や特徴を確認する。具体的に、以下の4点を研究課題として取り上げる。

- 1) 日本語学習者と日本語母語話者の陳述副詞の使用傾向には違いがあるのか。
- 2) 12の異なる母語背景を持った日本語学習者の陳述副詞の使用傾向には違いがあるのか。
- 3) タスクの違いによって日本語学習者の陳述副詞の使用傾向には違いがあるのか。
- 4) 日本語学習者の習熟度によって、陳述副詞の使用傾向には違いがあるのか。

4. 研究の方法

4.1 データ収集の対象

本稿では、大規模な日本語学習者コーパス I-JAS を用いて学習者による陳述副詞の使用傾向を調査する。I-JAS は 12 の異なる母語を持つ海外の教室環境学習者、および日本国内の教室環境・自然環境の日本語学習者の発話データと作文データを横断的に収集し、収録した大規模コーパスである。日本語学習者に加え、日本語母語話者にも学習者と同様の調査を行っているため、両群の使用状況を比較することができる。また、詳細な学習者情報（学習環境、家庭環境、学習スタイルなど）を備えている点、学習者がどの程度の日本語の言語知識を持っているかという日本語能力の客観テスト（J-CAT、SPOT）の結果が付与されている点などの特徴がある。さらに、I-JAS は、コーパス検索アプリケーション「中納言」を使用することで、文字列検索だけでなく、形態論情報を活用した検索もできる（迫田ほか 2020）。これらの特徴を活用し、より広い範囲の学習

者からより多くの陳述副詞の産出を得て、より一般的な陳述副詞習得像を得ることを目指す。

本稿は「中納言 2.4.5」(バージョン 2021.05) のデータを利用した。調査対象とするのは、海外の学習者で、母語別に、中国語が 200 名、韓国語が 100 名、タイ語が 50 名、ベトナム語が 50 名、インドネシア語が 50 名、英語が 100 名、ドイツ語が 50 名、フランス語が 50 名、スペイン語が 50 名、ロシア語が 50 名、ハンガリー語が 50 名、トルコ語が 50 名、合計 12 言語の 850 名である。これに 50 名の日本語母語話者を加え、総計 900 名を分析対象とする。また、タスクの違いによって日本語学習者の陳述副詞使用には違いがあるかを探るため、オンラインで公開されている全 5 種類 8 タスクのデータを利用する。迫田ほか (2020) によれば、各タスクの内容や記号は表 1 のようにまとめられる。

表 1 本研究で利用した I-JAS タスクのバリエーション

タイプ	番号	タスク	記号
発話	①	ストーリーテリング 1	ST1
		ストーリーテリング 2	ST2
	②	対話	I
	③	ロールプレイ 1	RP1
		ロールプレイ 2	RP2
④	絵描写	D	
作文	⑤	ストーリーライティング 1	SW1
		ストーリーライティング 2	SW2

さらに、習熟度別に分析するため、付与されている J-CAT スコアで学習者の習熟度判定を行う。学習者の習熟度は J-CAT のホームページに載っている解釈表¹を参考に、下位群、中位群、上位群という 3 つに分類した (表 2)。0 ~ 199 点は下位群で基本的な考えを述べることができるレベルである。200 ~ 299 点は中位群で、日常的な会話をこなすことができるレベルである。300 点以上は上位群とし、これらの学習者は学術的・専門的なコミュニケーションができる。各学習者のスコアを確認したところ、学習者の得点範囲は 59 ~ 355 点となっている。ほとんどの学習者は下位群と中位群に分布しており、それぞれ 415 名、392 名であった。一方の上位群は 43 名であったため、各グループの学習者の使用量を比較する際には、この人数差を考慮しなければならない。

表 2 J-CAT 得点による習熟度の判定

J-CAT 得点	レベルの目安	本研究での分類	人数 (名)
0-	初級前半	下位群 (0~199 点)	415
100-	初級		
150-	初級後半		
200-	中級前半	中位群 (200~299 点)	392
250-	中級		
275-	中級後半		
300-	上級前半	上位群 (300 点~)	43
325-	上級		
350-	超級 (母語相当)		

¹ <https://www.j-cat2.org/html/ja/pages/interpret.html> 参照 2021 年 7 月 13 日にアクセス

4.2 分析対象の抽出手順

本稿では、以下の手順でデータを収集した。

(ア) 副詞用例の抽出

まず「中納言」の「品詞検索」機能を利用し、日本語学習者によって使用された副詞用例を検索した。その結果、88254 件の使用例が見つかった。さらに、使用された副詞の種類数（タイプ数）を調べるため、コンコーダンサーの AntConc² にデータをかけ、530 種類の副詞を検出した。しかし、これらの副詞用例を確認したところ、擬声語や漢字カナ表記の混乱などが多数存在していることが分かった。I-JAS は、自動形態素解析器『MeCab』を用いて形態素解析を行っていたが、日本語学習者の発話データには発音の誤り、フィラー、語の断片や活用の誤り、予測不能な誤用、意味不明な語、多様な外国語などが頻繁に現れるため、解析結果の精度に限界がある（迫田ほか 2020）。そこで、手作業でデータの修正と副詞の再判定という作業を行う必要がある。作業の内容は主に以下の 4 点である。修正し再判定した結果、265 種類の副詞が残った。

修正①：530 種類の用例を自動形態素解析器『茶筌』にかけ、品詞解析を行った。基本的に副詞と判断されていなかったものは用例から削除した。

修正②：修正①の解析結果を目視で確認し、品詞認定に誤りがあれば、手作業で修正を行った。

例：「こう」「そう」は副詞と判定されていたが、前後の文脈から「こうした N」、「そういう N」のような連体詞の一部であると判断されるものを取り除いた。

修正③：同じ語源を持っている語を一種類としてまとめた。

例：めっちゃめっちゃ（めっちゃ）、あまり（あんまり）、やはり（やっぱり）…

修正④：表記（漢字、ひらがな、片仮名）の違いによって重複しているものを一種類としてまとめた。

例：うろうろ（ウロウロ）、いっぱい（一杯）、いろいろ（色々）…

(イ) 副詞用例からの陳述副詞用例の抽出

2.1 で述べたように、本稿の言うところの陳述副詞は、a. 〈意志・願望〉 b. 〈命令・依頼〉 c. 〈疑問〉 d. 〈感嘆〉 e. 〈確信・必然性〉 f. 〈推測・可能性〉 g. 〈強意否定・不可能〉 h. 〈評価・注釈〉 i. 〈比況〉 j. 〈仮定・条件〉 k. 〈譲歩〉 l. 〈取り立て〉 の 12 種類の意味用法を表すものである。これに基づいて、ステップ（ア）で確認した 265 種類の副詞から 51 種類の陳述副詞をリストアップし、本稿の研究対象とした。

(ウ) 陳述副詞を用いた産出文の抽出

「中納言」の「語彙素読み」検索機能を使用し、51 種類の陳述副詞をそれぞれ検索キーワードに設定し、抽出した陳述副詞を用いている文を Excel ファイルに保存した。

² AntConc とは、早稲田大学の Laurence Anthony 氏が開発したソフトウェアで、ウェブ上で無償で公開されている。AntConc には様々な言語処理機能が実装されており、検索目的により選択できる。本稿では、AntConc の Windows 64-bit (3.5.9) 版を使用した。

以上のような手順に従って、50名の日本語母語話者によって使用された陳述副詞用例も同様に抽出した。日本語母語話者の産出には246種類の副詞用例があり、その内53種類が陳述副詞であることが分かった。

5. 調査結果および考察

本節では調査結果および考察を述べる。5.1では日本語母語話者との比較について確認した結果を報告する。5.2、5.3および5.4ではそれぞれ母語別、タスク別、習熟度別に学習者の使用状況を考察する。

5.1 日本語学習者と日本語母語話者の使用概況

まず、日本語学習者を一群にまとめて、日本語母語話者と比較しながら全体的な使用傾向を概観する。主に陳述副詞の使用頻度、多様性、高頻度語、過剰使用・過少使用語という4つの側面から見ていく。

5.1.1 日本語学習者と日本語母語話者による陳述副詞の使用頻度

表3に示したように、使用された陳述副詞の延べ語数では日本語学習者は14032例で、母語話者の2266例より圧倒的に多いように見える。しかし、両群の対象者サイズが異なるため、10万語あたりの調整頻度を計算して比較すると、母語話者は855.5例であり、学習者の約1.7倍になっている。また、94%の学習者が陳述副詞を産出したのに対して、日本語母語話者は対象者全員が産出した。産出者一人当たりの産出数においては、日本語母語話者（45.3例）が学習者（17.6例）の約2.6倍であった。つまり、学習者の一人当たりの陳述副詞の産出能力は日本語母語話者より低いと言えるだろう。これは、学習者の母語や習熟度とも関連しているかもしれないが、5.2節と5.4節でさらに検証していきたい。

表3 日本語学習者と日本語母語話者の使用状況

	総対象者数	総語数 ³	陳述副詞延べ語数(用例数)	10万語あたりの使用頻度	産出者数	産出者一人当たりの産出数	総対象者に占める産出者の割合
学習者全体	850	2820866	14032	497.4	799	17.6	94.0%
母語話者	50	264885	2266	855.5	50	45.3	100.0%

5.1.2 日本語学習者と日本語母語話者による陳述副詞の多様性

次に、産出された陳述副詞の多様性について検討する。表4から、日本語学習者と母語話者はそれぞれ51種類、53種類の陳述副詞を使用し、ほぼ同程度であることがわかる。しかし、語彙の豊富さを測るために広く使われている指標である「GuiraudのR値」⁴（以下、R値）を計算し

³ 記号等除外した語数である。

⁴ GuiraudのR値：語彙の多様性ないし語彙密度を測る指標として最もよく知られているのはTTR（Type/Token Ratio）である。しかし、TTRはテキストや発話の全体の量が数値に影響を与えるという制約があるため、修正指標「GuiraudのR値」($R = \text{Type} / \sqrt{\text{Token}}$)の使用が多い（石川2012）。本稿でも陳述副詞の多様性を示す指標として、TTRではなく、GuiraudのR値を用いることにする。

たところ、母語話者の R 値は 1.1 であり、学習者の約 2.5 倍になっている。これにより、日本語学習者は同じ陳述副詞を繰り返して使用することが多いと推測できる。

表 4 日本語学習者と日本語母語話者の R 値

	陳述副詞 延べ語数 (用例数)	陳述副詞 異なり語数 (種類)	R 値
学習者全体	14032	51	0.4
母語話者	2266	53	1.1

5.1.3 日本語学習者と日本語母語話者が高頻度に使用した陳述副詞

次に、日本語学習者と母語話者における産出率⁵の高い陳述副詞用例について見ていく。表 5 では学習者と母語話者それぞれ産出率上位 20 位の用例を示した。★の項目は両グループに共通しているものである。両グループの重なりは、20 項目の中 14 項目であった。つまり、学習者と母語話者がともに頻繁に使用した陳述副詞に共通するものが多い。I-JAS はタスクの内容がある程度統制されているため、使用される語彙は近似しているのではないかと予測される。しかし、具体的な産出率を見てみると、両グループ間でかなりのずれが存在することが分かる。日本語学習者の上位 3 位の陳述副詞は「タブン」、「ヤハリ」、「ゼンゼン」であり、産出率の合計は 70.4% に達している。その内、1 位の「タブン」の産出率は 43.7% に上っており、母語話者の 17.3% より圧倒的に高い。

表 5 日本語学習者と日本語母語話者の高頻度使用陳述副詞（上位 20 位）

学習者			日本語母語話者		
順位	産出率	陳述副詞	順位	産出率	陳述副詞
1★	43.7%	タブン	1★	33.6%	ヤハリ
2★	14.4%	ヤハリ	2★	17.3%	タブン
3★	12.3%	ゼンゼン	3★	9.3%	ゼンゼン
4★	8.2%	モシ	4★	5.2%	チョウド
5★	5.3%	モチロン	5★	5.1%	トクニ
6★	2.8%	トクニ	6★	2.6%	モチロン
7★	1.5%	タダ	7★	2.4%	モシ
8★	1.5%	チョウド	8	2.3%	ナルホド
9★	1.5%	ゼヒ	9★	2.2%	タダ
10	0.9%	ヤット	10★	2.2%	マッタク
11	0.8%	カナラズ	11★	2.0%	トリアエズ
12★	0.8%	キット	12★	1.5%	ゼヒ
13	0.7%	タイテイ	13	1.5%	オソラク
14	0.5%	ドウゾ	14★	1.3%	トニカク
15★	0.5%	マッタク	15★	1.1%	キット
16	0.5%	ツマリ	16	1.1%	ナルベク
17★	0.4%	トニカク	17	1.0%	タシカ
18★	0.4%	トリアエズ	18★	0.8%	セッカク
19★	0.4%	セッカク	19	0.7%	ヨウヤク
20	0.4%	イクラ	20	0.7%	サスガ

⁵ 産出率は両グループの陳述副詞の産出用例数における各陳述副詞の産出用例数の割合を%で表したものである。

その一方で、日本語母語話者の1位は「ヤハリ」であり、産出率は33.6%になっている。学習者では「ヤハリ」の産出率が14.4%にとどまっている。また、日本語学習者と母語話者における同じ順位の陳述副詞を見ると、上位6位においては、2位を除き、学習者の産出率は母語話者より高いが、7位から20位までは逆に母語話者の産出率がより高いことが見られた。つまり、日本語学習者は、上位の陳述副詞の使用において繰り返しが母語話者より多い。これは、5.1.2で述べた「日本語学習者は同じ陳述副詞を繰り返して使用することが多い」という推測を裏付けている。

5.1.4 日本語学習者による過剰使用・過少使用陳述副詞

さらに、母語話者に対して、日本語学習者が特徴的に使用している語を検討する。コーパス言語学において、「特徴語」は、基準データと比べて顕著に高頻度又は低頻度となっている「過剰使用・過少使用語」と定義され、特徴度は統計値を用いて量化される(石川 2012)。本稿では、コンコーダンスー AntConc を用いて特徴語を抽出する。特徴語の抽出に使用する統計量は対数尤度比で、頻度に差があるかどうかを判断する有意水準は5%である。抽出の結果は表6に示す。統計量の前に表示されている「+」は母語話者に比べて学習者のほうが顕著に多く使用する過剰使用語であることを、「-」は顕著に少なく使用する過少使用語であることを示す(迫田ほか 2020)。日本語学習者は、「タブン」、「モシ」、「モチロン」、「ゼンゼン」を顕著に多用する。中でも、「タブン」の過剰使用度は顕著に高い。その一方で、日本語学習者が過少使用する陳述副詞には「ヤハリ」、「チョウド」、「ナルホド」、「オソラク」がある。同じ推測の意味を表すものであるが、日本語学習者は「オソラク」より、「タブン」を多用していることが分かった。

表6 学習者の過剰・過少使用陳述副詞(上位4位)

過剰使用			過少使用		
陳述副詞	統計量	効果量 ⁶	陳述副詞	統計量	効果量
タブン	+626.3	3.7	ヤハリ	-432.9	0.3
モシ	+122.3	3.6	チョウド	-103.3	0.3
モチロン	+34.8	2.1	ナルホド	-82.2	0.1
ゼンゼン	+17.3	1.4	オソラク	-64.7	0.1

*有意水準5%

以下、日本語学習者と日本語母語話者による「タブン」「ヤハリ」「チョウド」の使用例を挙げた。用例(1)(2)(3)(4)(6)は対話タスク(I)から、(5)はストーリーテリングタスク(ST2)から抽出したものである。

(1) 毎日、歩いて、たぶん、うん、にじゅぶん、さんじゅぶん、かかります。

(日本語学習者：CCH12)

(2) 調査者：へー〈んー〉、中国広いですからねー。

学習者：はいはいはい、たぶん。

(日本語学習者：CCH06)

⁶ オッズ比の値であり、1より大きいと学習者側で該当語が生じやすいことを、1より小さいと生じにくいことを示す(迫田ほか 2020)。

- (3) 調査者：ここはいいですよっていう。
 学習者：あ、ふーん、たぶん、うん、あー、山なんですけど… (日本語学習者：KKD05)
- (4) やっぱり、お金は〈うん〉大事だと思いますね… (日本語母語話者：JJJ02)
- (5) ちょうど警察がやってきて… (日本語母語話者：JJJ46)
- (6) ちょうど先週終わったばかり… (日本語母語話者：JJJ14)

過剰使用の「タブン」の使用例を確認したところ、教科書でよく提示されている「タブン〜ダロウ」のような推測を表す用例もあれば、用例 (1) (2) (3) のような主張を弱める、回避する例、具体的な事柄を修飾せずフィラー的な用法も多数確認できた。過少使用の「ヤハリ」は、用例 (4) のように日本語母語話者の日常会話表現において多用される語であり、実際の会話では「ヤハリ」を付加することによって、共通知識・情報の存在を暗示したり、自己主張を和らげたりし、発言がしやすくなる効果がある (大関 1993b)。日本語母語話者にとってはごく当たり前の心理的前提などの翻訳困難な要素、あるいは言語形式に現れないニュアンスを含む副詞は、日本語学習者にとって習得難易度が高い項目だと思われる。最後に、「チョウド」の用例について検討する。「チョウド」には「ちょうど絵のようだ」のような比況用法があるため、本稿は研究対象として取り上げたが、実際の使用例を確認したところ、比況用法より、用例 (5) (6) のような話し手の主観的な「さいわい」、「あいにく」の気持ちや評価の意味を表すものが大量に混在している。今後の研究では産出例の意味用法を厳密に分類して検討する必要があると思われる。

以上、陳述副詞の使用頻度、多様性、高頻度語、過剰使用・過少使用語という4つの側面から、日本語母語話者と学習者の使用実態を概観し、両グループの使用傾向に差異があることを確認した。その結果、日本語学習者によって使用された陳述副詞の頻度 (10万語あたりの調整頻度) も多様性も日本語母語話者より低いことが分かった。また、日本語学習者は「タブン」などの高頻度陳述副詞を繰り返して使用する傾向がある一方、「ヤハリ」などを過少使用する傾向が見られた。これから5.2、5.3、5.4ではさらに母語別、タスク別、習熟度別に日本語学習者における陳述副詞の使用状況を考察していく。

5.2 母語別陳述副詞の使用状況

次に、12の異なる母語背景を持った日本語学習者の陳述副詞の使用状況を見ていく。母語別の陳述副詞の使用状況を以下の表7にまとめた。比較のため、50名の日本語母語話者の使用状況を表の最下端に示した。10万語あたりの調整頻度を観察すると、学習者の使用頻度は259.8～1006.3例の範囲にある。その内、ハンガリー語話者は1006.3例であり、日本語母語話者の855.5例を超えている。次に、ドイツ語話者 (807.7例)、中国語話者 (613.9例)、英語話者 (588.3例)、フランス語話者 (504.6例) が続いており、学習者全体の497.4例 (表3) より高い。ベトナム語話者とインドネシア語話者の産出が相対的に少ないことが観察された。

表7 母語別の陳述副詞の使用状況

母語	総対象者数	総語数	陳述副詞延べ語数(用例数)	10万語あたりの使用頻度	産出者数	産出者一人当たりの産出数	総対象者に占める産出者の割合
中国語	200	677097	4157	613.9	200	20.8	100.0%
韓国語	100	404800	1878	463.9	99	19.0	99.0%
英語	100	300012	1765	588.3	93	19.0	93.0%
ハンガリー語	50	174104	1752	1006.3	49	35.8	98.0%
ドイツ語	50	168003	1357	807.7	49	27.7	98.0%
フランス語	50	142300	718	504.6	46	15.6	92.0%
ロシア語	50	169406	704	415.6	46	15.3	92.0%
トルコ語	50	151947	605	398.2	45	13.4	90.0%
タイ語	50	153655	574	373.6	45	12.8	90.0%
スペイン語	50	144341	531	367.9	37	14.4	74.0%
インドネシア語	50	170888	444	259.8	46	9.7	92.0%
ベトナム語	50	164313	439	267.2	44	10.0	88.0%
母語話者	50	264885	2266	855.5	50	45.3	100.0%

しかし、表8に示した12言語の日本語学習者のR値を確認すると、ロシア語話者が最も高いが、他にベトナム語話者、インドネシア語話者、タイ語話者、トルコ語話者、韓国語話者のR値が日本語母語話者に近いことが分かった。つまり、これらの日本語学習者から産出された陳述副詞の多様性は日本語母語話者に近いのである。その一方で、前述した陳述副詞の使用頻度が高いハンガリー語話者、ドイツ語話者、中国語話者、英語話者は逆にR値が比較的到低いことが観察された。換言すれば、陳述副詞の使用頻度が高いからといって、産出された陳述副詞の多様性が高くなるわけではないのである。

表8 母語別日本語学習者のR値

母語	総語数	陳述副詞延べ語数(用例数)	陳述副詞異なり語数(種類)	R値
中国語	677097	4157	44	0.7
韓国語	404800	1878	42	1.0
英語	300012	1765	29	0.7
ハンガリー語	174104	1752	28	0.7
ドイツ語	168003	1357	28	0.8
フランス語	142300	718	23	0.9
ロシア語	169406	704	29	1.1
トルコ語	151947	605	24	1.0
タイ語	153655	574	25	1.0
スペイン語	144341	531	16	0.7
インドネシア語	170888	444	21	1.0
ベトナム語	164313	439	21	1.0
母語話者	264885	2266	53	1.1

また、地域差についてであるが、島崎(2019)は副詞全般の使用量を考察し、アジア圏学習者の方が欧米の学習者より日本語母語話者に近い副詞の使用傾向がみられたと指摘している。本稿では陳述副詞の使用頻度であれ、産出された陳述副詞の多様性であれ、欧米圏・アジア圏が混在し、はっきりとした地域差は見られなかった。

5.3 タスク別陳述副詞の使用状況

本節ではタスク別に日本語学習者の使用状況を調査、比較した結果を示す。表9から分かるように、10万語あたりの使用頻度ではロールプレイ2 (RP2) が1位であり、次に対話 (I)、ロールプレイ1 (RP1)、絵描写 (D) と続いている。ストーリーテリング (ST1、2) とストーリーライティング (SW1、2) は、10万語あたりの使用頻度も相対的に低く、産出者数の割合も13.1%～26.4%にとどまっている。

表9 タスク別の陳述副詞の使用状況

タスク	総対象者数	総語数	陳述副詞延べ語数 (用例数)	10万語あたりの使用頻度	産出者数	産出者一人当たりの産出数	総対象者に占める産出者の割合	
発話	D	557	188935	792	419.2	224	3.5	40.2%
	I	850	1907547	10060	527.4	774	13.0	91.1%
	RP1	850	169277	807	476.7	371	2.2	43.6%
	RP2	850	168900	1457	862.6	507	2.9	59.6%
	ST1	850	105382	146	138.5	111	1.3	13.1%
	ST2	850	117650	323	274.5	216	1.5	25.4%
作文	SW1	850	79744	153	191.9	133	1.2	15.6%
	SW2	850	83431	294	352.4	224	1.3	26.4%

しかし、表10のR値をみると、ストーリーテリング (ST1、2) とストーリーライティング (SW1、2) の値が比較的に高いことが分かった。日本語学習者はストーリーを述べたり書いたりする際に、多様な陳述副詞を使用している可能性がある。使用頻度が高かった対話タスク、絵描写タスク、ロールプレイタスクのR値は1を下回っていることが観察された。

表10 タスク別日本語学習者のR値

タスク	総語数	陳述副詞延べ語数 (用例数)	陳述副詞異なり語数 (種類)	R値
発話	D	188935	792	0.6
	I	1907547	10060	0.5
	RP1	169277	807	0.9
	RP2	168900	1457	0.8
	ST1	105382	146	1.6
	ST2	117650	323	1.2
作文	SW1	79744	153	1.5
	SW2	83431	294	1.8

次に、各タスクでは具体的にどのような陳述副詞が使用されたかを見ていく。表11では、各タスクにおいて、それぞれ使用頻度上位5位の陳述副詞を示した。絵描写、対話、ロールプレイでは「タブン」を、ストーリーテリングとストーリーライティングでは「ゼンゼン」を多用する傾向が見られた。特に、絵描写タスクにおいて、「タブン」の使用率は88.6%になっていることが目立っている。前坊 (2012) は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における「タブン」の出現傾向を調査した。その結果、「タブン」は会話、会談、モノローグ的な文章に多く現れていることが指摘されている。表11を確認したところ、発話タスクの高頻度使用陳述副詞には「タブン」

が入っているが、作文タスクの高頻度使用陳述副詞には「タブン」がなく、前坊（2012）の示唆と一致している傾向が観察された。

表 11 タスク別学習者が高頻度使用した陳述副詞（上位 5 位）

タスク	高頻度使用陳述副詞（産出率）	
D	タブン (88.6%)、ヤハリ (2.3%)、ゼンゼン (2.1%)、モシ (1.4%)、キット (1.4%)	
I	タブン (45.6%)、ヤハリ (15.7%)、ゼンゼン (10.9%)、モシ (6.4%)、モチロン (6.2%)	
発 話	RP1	タブン (39.2%)、モシ (28.6%)、ヤハリ (9.9%)、モチロン (5.5%)、ゼヒ (5.1%)
	RP2	タブン (29.6%)、ヤハリ (21.9%)、ゼンゼン (17.1%)、モシ (16.9%)、モチロン (3.4%)
	ST1	ゼンゼン (51.4%)、タブン (14.4%)、ヤット (8.2%)、セッカク (4.8%)、ヤハリ (4.1%)
ST2	ゼンゼン (35.6%)、タブン (18.6%)、チョウド (12.1%)、ヤット (9.3%)、ヤハリ (4.0%)	
作 文	SW1	ゼンゼン (47.1%)、セッカク (12.4%)、ヤット (8.5%)、ヤハリ (5.9%)、ヨウヤク (4.6%)
	SW2	ゼンゼン (25.2%)、ヤット (17.3%)、チョウド (16.0%)、イクラ (6.1%)、サイワイ (5.4%)

さらに、日本語学習者によって産出された「タブン」の具体例を見ていく。用例 (7) (8) (9) は絵描写タスク (D) から、(10) (11) は対話タスク (I) から、(12) はストーリーテリングタスク (ST2) から抽出した。

- (7) あ、あれ、たぶんコーヒーショップだと思います。 (日本語学習者：CCS01)
- (8) たぶん、あー、着物を着ています。 (日本語学習者：EGB01)
- (9) たぶん、泥棒がこの家に入った。 (日本語学習者：FFR06)
- (10) 調査者：そうですね〈うん〉でもお金がないと行けないかもしれませんが。
 学習者：たぶん〈{笑}〉{笑}
 調査者：お金があっても、時間がないと行けないですけど〈{笑}〉{笑} 難しいですね〈うん〉どっちって言われたらやっぱり時間ですか？
 学習者：うん、たぶん。 (日本語学習者：EAU03)
- (11) 調査者：どんな仕事を、したいと思っています？
 学習者：うん、それは、うん、たぶん、ええ、ううん、うう、国際交流〈あああ〉仕事ですが〈ええ〉最初にたぶん仕事のためじゃなくて普通の観光として〈うんうん〉日本に行きたいです。 (日本語学習者：HHG09)
- (12) なんかー、ケンさんに声をかけてー、たぶん、なんか、君は一何をやっている、とゆうことを〈ん〉、を聞いてー、でもーその時は、マリはもう {咳}、もう、たぶん、起きましたから、たぶん、状態は〈ん〉、もうみんなにわかるようになりました… (日本語学習者：HHG47)

具体的な産出文を見ると、絵描写タスクの産出文においては、用例 (7) (8) (9) のように「タブン」の後ろに推測の内容、具体的な事柄が接してくることが多い一方、対話やロールプレイタスクにおいては、文中に挿入し単独で使用されたり、応答表現として使用されたりする例（用例 10、11）が多く見られた。談話中の「タブン」には、適切な言葉を探すまでの時間稼ぎをしたり、断定を避けたり、表現を和らげたりする働きがある（国立国語研究所 1991、島崎 2019）ため、学習者は「タブン」を用いることで考える時間を作って、コミュニケーションを続けよう、円滑にしようとしている可能性が考えられる。ただし、用例 (12) のように必要以上に使用した

例もあった。

5.4 習熟度別陳述副詞の使用状況

本稿では、日本語学習者を J-CAT の得点を基に下位群、中位群、上位群の 3 つのグループに分けた。日本語習熟度が上がるにつれ、陳述副詞の使用状況はどのように変化していくだろうか。10 万語あたりの使用頻度では、下位群が 381.5 例、中位群が 574.2 例、上位群が 681.2 例であり、日本語能力が上がるに伴い、高くなっていることが観察された。さらに、カイ二乗検定⁷（適合度の検定）を行った結果、学習者の陳述副詞の使用頻度は学習者の習熟度によって異なることが確認された（ $\chi^2(2) = 84.787, p < .01$ ）。つまり、学習者の習熟度が上がるにつれ、陳述副詞の使用頻度も増えると解釈できるだろう。その一方で、上位群であっても、使用頻度は母語話者の 855.5 例を超えていないことが分かった。

表 12 習熟度別の陳述副詞の使用状況

習熟度	総対象者数	総語数	陳述副詞		10 万語あたりの使用頻度	R 値	産出者一人当たりの産出数	総対象者に占める産出者の割合
			延べ語数 (用例数)	異なり語数 (種類)				
下位群	415	1225545	4676	37	381.5	0.5	12.7	88.4%
中位群	392	1411968	8107	49	574.2	0.5	20.8	99.2%
上位群	43	183353	1249	38	681.2	1.1	29.0	100.0%
母語話者	50	264885	2266	53	855.5	1.1	45.3	100.0%

また、産出された陳述副詞の異なり語数は、下位群から中位群で増えているが、上位群になるとまた減少する傾向が見られた。R 値と対応して見たところ、下位群と中位群が同じ 0.5 であるが、上位群になると 1.1 になり日本語母語話者並みの多様性に達していることが分かった。中位群の日本語学習者は、陳述副詞の使用頻度ではうまく上達しているものの、陳述副詞の多様性では上達が横ばいであった。そのほか、産出者一人当たりの産出数、産出者の割合は習熟度とともに増えていることが観察された。

表 13 習熟度別学習者が高頻度使用した陳述副詞（上位 5 位）

習熟度	高頻度使用陳述副詞（産出率）				
下位群	タブン (56.9%)	ゼンゼン (13.8%)	モシ (7.8%)	モチロン (6.4%)	ヤハリ (5.0%)
中位群	タブン (36.7%)	ヤハリ (18.5%)	ゼンゼン (12.2%)	モシ (9.0%)	モチロン (5.2%)
上位群	タブン (39.8%)	ヤハリ (23.7%)	ゼンゼン (6.6%)	モシ (4.1%)	トクニ (3.5%)
日本語母語話者	ヤハリ (33.6%)	タブン (17.3%)	ゼンゼン (9.3%)	チョウド (5.2%)	トクニ (5.1%)

表 13 の各習熟度が高頻度使用した陳述副詞を見てみると、下位群では「タブン」の使用率が最も高い。中位群と上位群になると、「タブン」の使用率が少々抑えられ、代わりに学習者全体に過少使用された「ヤハリ」の使用の伸びが際立っている。上位群学習者と日本語母語話者の陳述副詞使用を比較してみると、使用頻度、産出多様性、一人当たりの産出数が日本語母語話者に近づ

⁷ カイ二乗検定は、オンライン上のプログラムである js-STAR XR release 1.1.5j を利用した。

いていることが認められる。しかし、「タブン」の過剰使用、「ヤハリ」の過少使用の傾向は依然として存在している。

6. まとめおよび今後の課題

本稿では、I-JAS のデータを用いて、マクロ的な視点から日本語学習者における陳述副詞の使用傾向を実証的に考察した。考察は主に日本語母語話者との使用上の違い、母語別の違い、タスク別の違い、習熟度別の違いという 4 点をめぐって行った。その結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 日本語学習者によって使用された陳述副詞の頻度であれ、多様性であれ、母語話者より低いことが分かった。また、日本語学習者は「タブン」を繰り返して過剰使用する傾向がある一方、「ヤハリ」を過少使用する傾向が目立った。
- 2) 12 の異なる母語背景を持った日本語学習者の使用状況を比較した結果、ハンガリー語話者、ドイツ語話者、中国語話者、英語話者は使用頻度が比較的に高いが、ベトナム語話者、インドネシア語話者、タイ語話者、トルコ語話者、韓国語話者は多様性がより高いことが分かった。また、陳述副詞の使用頻度であれ、産出された陳述副詞の多様性であれ、欧米圏・アジア圏が混在し、はっきりとした地域差は見られなかった。
- 3) タスクにより学習者の陳述副詞の使用頻度、多様性が異なることが分かった。陳述副詞の使用頻度ではロールプレイ、対話、絵描写タスクがストーリーテリング、ストーリーライティングタスクより高いが、産出多様性では逆にストーリーテリング、ストーリーライティングのほうがより高いことが見られた。また、学習者が過剰使用している「タブン」は作文タスクより発話タスクで高頻度に使われ、使用例にはフィラー的な用法、また応答表現としての用法が多いことが分かった。
- 4) 陳述副詞の使用頻度、産出多様性、一人当たりの産出数では、日本語習熟度が上がるにつれ高くなり、日本語母語話者に近づいている傾向が見られたが、上位群になっても、「タブン」の過剰使用、「ヤハリ」の過少使用の傾向は依然として残っている。

本稿では、陳述副詞の習得メカニズムの解明の一助となることを目指し、I-JAS を用いて日本語学習者による陳述副詞の量的な使用傾向を明らかにした。今後、陳述副詞の習得状況を考察する際に、語レベルだけでなく、文レベルや談話レベルの考察も必要であろう。陳述副詞が表す意味機能の観点から学習者の産出文を分類することによって、各意味機能における構文的特徴や談話単位での振る舞いの特徴、および習熟度の上達に伴うそれらの特徴の変化を明らかにすることを今後の課題としたい。

参考文献

- 石川慎一郎 (2012) 『ベーシックコーパス言語学』 ひつじ書房
- 王沖 (2004) 「日本語陳述副詞「きっと」と中国語語気副詞“一定”との対照研究—日本語教育における陳述副詞「きっと」の指導のために—」『人間文化論叢』7 pp.325-334 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科
- (2005) 「中国の大学日本語教育における副詞の指導への考え—「きっと」「必ず」の場合—」『人間文化論叢』8 pp.259-266 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科

- (2006a) 「陳述副詞「きっと」の意味構造と日本語教育への応用可能性 — 認知言語学観点から —」『日本認知言語学会論文集』 pp.454-463 日本認知言語学会
- (2006b) 「副詞『きっと』の習得に関する研究 — 中国人日本語学習における典型的な用法から考える —」『日本語教育論集』 22 pp.19-31 国立国語研究所日本語教育基盤情報センター
- (2007) 『認知言語学的観点を取り入れた陳述副詞「きっと」「必ず」の意味研究：日本語教育のために』 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士学位論文 未公開
- (2008) 「中国語を母語とする日本語学習者の「きっと」と「必ず」の意味知識（第二言語としての日本語の多義語の習得と日本語教育への応用）」『日本認知言語学会論文集』 8 pp. 607-610 日本認知言語学会
- (2009) 「日本語「きっと」「必ず」と中国語“一定”との対照研究」『日中言語研究と日本語教育』 2 pp. 45-52 『日中言語研究と日本語教育』編集委員会
- (2014) 「中国人日本語学習者の陳述副詞「必ず」の習得研究」『知性と創造 — 日中学者の思考』 5 pp.121-131 日中人文社会科学学会
- 大関真理 (1993a) 「日本語学習用教科書の副詞語彙」『言語文化と日本語教育』 5 pp.23-34 お茶の水女子大学日本語文化学会
- (1993b) 「日本語教育の視点からみた副詞」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』創刊号 pp.1-14 早稲田大学大学院教育学研究科
- 川口良・佐々木泰子 (1996) 「日本人と日本語学習者の作文における副詞の発達過程に関する研究」『お茶の水女子大学人文科学紀要』 49 pp.219-238 お茶の水女子大学
- 工藤浩 (2000) 「副詞と文の陳述的なタイプ」仁田義雄・益岡隆志・工藤浩『日本語の文法3 モダリティ』 pp.164-234 岩波書店
- 国立国語研究所 (1991) 『日本語教育指導参考書 — 副詞の意味と用法 —』国立国語研究所
- 迫田久美子・小西円・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子 (2016) 「多言語母語の日本語学習者横断コーパス International Corpus of Japanese as a Second Language」『国語研プロジェクトレビュー』第6巻3号 pp.93-110 国立国語研究所
- 迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬 (編著) 佐々木藍子・須賀和香子・野山広・細井陽子・八木豊 (著) (2020) 『日本語学習者コーパス I-JAS 入門：研究・教育にどう使うか』くろしお出版
- 島崎英香 (2019) 「話し言葉における日本語学習者の副詞の使用実態：I-JAS を用いて韓国語話者を中心に」『日本語・日本語教育』第3号 pp.65-84 立教大学日本語研究センター
- 張璇 (2009) 「陳述副詞の習得上の問題点に関する研究 — 中国人日本語学習者を対象として —」『教育学研究紀要』 55 pp.525-530 中国四国教育学会
- 前坊香菜子 (2012) 「コーパスにおける「たぶん」「おそらく」の使用傾向の分析」『一橋日本語教育研究』 1号 pp.49-60 ココ出版
- 山田孝雄 (1936) 『日本文法学概論』 宝文館
- 李凌云 (2011) 「日本語の陳述副詞の習得について」『東アジア日本語教育・日本文化研究』 14 pp.537-551 東アジア日本語教育・日本文化研究学会

(こ な 東京外国語大学総合国際学研究科国際日本専攻 博士後期課程)

The Usage of Declarative Adverbs by Learners of Japanese as seen in the I-JAS Learner Corpus

KO Na

KEYWORDS: declarative adverbs, usage tendencies, differences according to native language, differences according to task, differences according to proficiency level

In this research, the author utilizes the I-JAS Japanese learner corpus to examine, from a macro-level, tendencies in the usage of declarative adverbs by learners of Japanese. This examination focuses on differences in usage between learners and native speakers, differences among learners depending on their native language, differences in usage depending on the given task, and differences depending on the proficiency of the speaker. The following observations were made: 1. Learners of Japanese used declarative adverbs less often, and with less variety, than native speakers. Additionally, Japanese learners overused the adverb *tabun*, while also underutilizing *yahari*. 2. Speakers of Hungarian, German, Chinese, or English used a relatively large number of adverbs, however speakers of Vietnamese, Indonesian, Thai, Turkish, or Korean used a greater variety of adverbs. 3. Learners' use of adverbs differed depending on the task they were engaged in; learners displayed a tendency to overuse *tabun* while engaged in utterance tasks. 4. There was a tendency for learners to use a greater number of declarative adverbs as their proficiency level rose and they approached native speakers.